氏名（本籍）	つちや　ゆうじ 土屋　祐二（東京都）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 113 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	鋳型とフォルム　－20 世紀美術に見られる形態表面とマッスの分離－
論文審査委員	主　査　　教　授　　前　川　義　春 副　査　　教　授　　関　村　　誠 副　査　　准教授　　加治屋　健　司

論文内容の要旨

本研究は20世紀の美術作品の中でマッスを表面において捉える見方がどのような経緯で現れてきたのかを明らかにし、その大きな要因である型どり（キャスティング）技法との関係を検証したものである。

マッス（量塊性、ボリューム）は彫刻の中心的な概念であり、物質によって内部を充実させた塊としての存在感である。ところが20世紀以降には表現様式が急激に変化し、構成彫刻や既製品を用いたオブジエ作品などマッスを持たない、もしくは問題としない立体作品が現れ始めた。この事は形態を表面において捉える20世紀美術の一つの傾向として考えられるが、マッスを表現する作品の中にも形態表面を強く意識した新しい見方をするものが現れる。それは形態と空間とを隔てる「境界面」を内部から切り離し、独立した造形要素として捉える見方である。本稿ではこの現象を「形態表面とマッスの分離」として考察を行い、その要因として型どり技法の工程で生じる「鋳型」が新しい形態（フォルム）の見方を生み出したことを明らかにした。

境界面としての形態表面はあくまで物質的に存在する事の出来ない概念的な要素である。しかしそれを立体として表現する事を可能にしたのが型どり技法である。19世紀以前の慣習では制作の補助的な役割しか持たなかったが、表面に石膏など別の物質を接触させて複製を生み出すこの技法の特性は、マッスの捉え方を大きく変化させるきっかけを作ったと考えられる。

本研究では立体表現の中で形態表面が従来の「量塊」からどのように分離し独立したのかを具体的な作家の作品展開を追いつつ明らかにし、その上で型どり技法の特性が立体表現とどのような関係にあるのかを考察する。全体は二章で構成されており、第一章では立体表現におけるマッスと表面の分離について見ていく。第二章では型どり技法と

表現の歴史的な経緯を振り返り、20世紀の表現にいかに関わってきたのかを考察する。

第一章ではまずマッスが表面化した経緯を振り返る。20世紀に入り様々な観点から「表面」に対する意識が高まるが、現代作家も含め立体作品における表面への意識は光の反射などの視覚的効果を狙ったものである。そのほか、作品の材質感を高めるために形態表面のテクスチャを意識した作品が見られる。

マッスを表面において捉えた作品は、まずヘンリー・ムーアの穴や凹みの形を取り入れた彫刻に見る事が出来る。その後、アントニー・ゴームリーの人体像、ブルース・ナウマンの実験的な作品、レイチェル・ホワイトリードのモニュメンタルな作品など、型どり技法を用いて鋳型の形態を作品化した例に見られる。それらの作品における鋳型を作品化することの意義は、日常的に外側から見ているマッスの表面を裏側から見せる事にある。その結果、マッス内部と外部空間とを隔てる境界面が意識されることになる。また型どり技法ではないが、原理の似ている石彫の星取り技法や近年のコンピュータによる3D加工技術による「計測」による複製技法も境界面としての形態表面を意識させる要因と考えらえる。

では、なぜそれまで芸術作品としての価値が認められなかった鋳型が立体美術の表現の中に現れたのだろうか。第二章で型どり技法の歴史を振り返った結果、美術において「身体をオブジェ化する」試みの中で型どり技法が注目され始めた事が分かった。ジャスパー・ジョーンズやマルセル・デュシャンは石膏による身体の複製をオブジェとして使用し始めた作家だが、その意図はそのまま立体作品とすることの難しい身体を作品化することだったと考えられる。19世紀以前の立体制作では型どり技法の鋳造以外の主な目的は「身体を複製する」ことであったが、20世紀以降には使用素材が拡大する中で身体への関心が高まった。また、50年代以降に身体的な行為や時間の経過によって生じる「痕跡」を作品化する流れの中で、接触によって複製を生み出す鋳型の「版」としての機能が注目されたことも影響を与えている。

以上のように、マッス表面を空間的な境界として捉える見方は型どり技法によって生じる「鋳型」を作品に取り入れる事で表現されてきた。制作に用いられる技法が表現内容に影響を与えるという意味では、近年発達する3Dプリント技術のように形態を情報化し加工することによってもまた、形態に対しての見方が変化すると考えられる。そのような新たな技術の変化によって新たにどのような形の見方が現れるのかは、今後もさらに考察する必要がある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20 世紀の立体表現において表面性がマッスとは分離されたかたちで表現されることになった動向を見定め、その意義を探究し、その検証のために型取り技法の果たす役割の変化を辿った研究である。第一章において、まず 20 世紀以降に現れた新しいマッスに対する捉え方を、アントニー・ゴームリーやレイチェル・ホワイトリード等

の作家の作品を綿密に検討しつつ明らかにして、マッスから表面の分離という申請者独自の観点から現代の立体表現の解釈を試みている。その際、「境界面」「視点の反転」など、型とフォルムの関係の様々な局面を適切な用語で考察し分析することに成功している。第二章においては、まず古代から現代に至る型取り技術の歴史的経緯を丁寧に振り返ってまとめ、19 世紀から 20 世紀にかけての型取りと制作の関係の変化に特に着目し、とりわけ、オーギュスト・ロダンのアッサンブラージュの手法を適切に位置づけ、さらに現代において、反転の効果を強調するなど、型取りが独自の表現手法に組み込まれてきたことを実証的に確認している。論点を適切に定めて、明解でわかりやすい記述により構成された論文であり、申請者自身の主張が説得力をもって展開されている。型のもつ問題点と可能性とを、申請者自身の制作経験に密着した観点から考察を展開させており、創作における堅固な理論的基盤となっている。以上のことから、本申請において論文合格とした。